『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第６９回】

「お金」― ほしいですよね、たくさん。あなたは宝くじを買ったことがありますか？　わたしは何度か買いました。当たっても「300 円」ばかりなので、数回でやめました。「toto　BIG」というサッカーくじを知っていますか？　Ｊリーグ１部、２部の 13 試合の勝敗をコンピューターが予想するものです。自分で考える必要がありません。コンピューターまかせです。とんでもない予想もでてきます。でも文句は言えません。すべて正解ですと「６億円」が手に入ります。これも一口「300 円」です。10 数回、買いました。毎回、正解数は半分以下です。「自分で予想した方が正解数が多いんじゃねェ …」というほどです。最近は買っていません。神さまは「あぶく銭」は与えてくださらないことがわかりました。「悪銭身につかず」とも言いますし。また、「億」のお金が当たったがゆえに、人生を狂わした ― なんて話があるほどですから、神さまのご配慮に感謝しなくてはならないでしょう。

さて今回は、お金のために身を持ちくずしてしまった「弟」の話です。でも、弟だけの話ではありません。彼の「兄」もたくさんのことを考えさせてくれます。そして何といっても、彼の「父」に出会わせてもらえます。さて、どんな親子なのでしょう。

✞　『あなたはわたしの愛する子』（１）　―『ルカ』15 章 11～32 節 ―

きょうお話しするのは、『ルカによる福音書』にある「放蕩息子のたとえ」という、新約聖書のなかでも有名なたとえ話の一つです。さっそく読んでみましょう。

「驕れる者久しからず」―　家を出た弟息子

……

11 イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。 12 弟の方が父親に、『お父さん、私が頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。」

……

二人の息子のうち、弟が「前もって遺産を分けてください」と父に申し出ました。当時のユダヤ社会では、「長男」はほかの兄弟の２倍の遺産を受けとる権利をもっていたそうです。この家は二人兄弟ですから、たとえばこの父が「9 億円」の財産を持っていたとすれば、兄は６億円、弟は３億円をもらえることになります。遺産はふつう、ある人が亡くなったときに相続するものです。息子に言われて「はいそうですか。いいよ」とは簡単にはいかないものでしょう。父親は「なぜ今、必要なのか」を弟息子に聞いたはずです。息子は〈夢〉を語ったのではないでしょうか。「よその土地に行って働いてかせぎ、自分の力で生きていきたい …」というような若者らしい夢を。父親は予測できない息子の将来に不安や危険を感じ、迷ったにちがいありません。しかし、「かわいい子には旅をさせよ」という言葉が当時のユダヤ社会にあったかどうかはわかりませんが、結局は愛する息子の願いを聞きいれたのでした。さて、弟息子は父の財産をもらってどうしたのでしょう。

……

13 何日もたたないうちに、下の息子は全部をお金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。

……

ほ～ら、見たことか！　財産はお金、土地、建物、そして家畜もいたでしょう。弟はそれを全部お金に換えて家を出て、遠い国に行ってしまいます。そして『放蕩の限りを尽くし』というのです

から、湯水のごとくお金を使いまくりました。食べ物にハエが集まってくるのと同じように、お金のある人間には計算高い人々が集まってきます。その上、この弟がハンサムだったりしたら(そうではなくても！)多くの女性も寄ってきます。「家さえ出れば、自由で新しい世界が広がり、仲間と楽しくゆかいに飲み食いして、快適な生活ができるぞ」という弟息子の夢は実現しました。それがすべて「お金」のおかげであることも知らず …。

14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。
15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世
話をさせた。 16 彼は豚の食べるイナゴ豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人
はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い
人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。 18 ここをたち、父のと
ころに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しまし
た。 19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』 20 そして彼
は、そこをたち、父親のもとに行った。

「驕(おご)れる者久しからず」― 『平家物語』の世界です。どこかの国の「一強独裁政治」もそろそろ終焉を迎えたようですが …。それはともかく、「金の切れ目が縁の切れ目」。金がなくなると人々は彼から離れていきました。一文無しになった弟息子にダメを押すように飢饉が襲い、食べるものさえ手に入らなくなりました。そこで畑を持ち、家畜を飼育している人にすがりました。任されたのは「豚」の世話。また出てきましたね、豚サン。ユダヤ人にとっては見たくもないほど穢れた動物です。つまり豚の世話をするということは、どん底の生活を強いられたということを意味します。豚のえさであるイナゴ豆を食べてでもおなかを満たそうとする弟息子ですが、それさえ与えてもらえません。これ以上ない孤独でみじめな生活をしなければならなかった彼は、「これまで父親がどれほど自分のことを思っていてくれたか」、「家族がいる家で暮すことがどんなに恵まれたことなのか」、そして「お金で結びついた友達がどれほど当てにならないか」に気づきました。自分が選んだ道が何であったか、行きつく先がどんなものであるかがやっとわかったのです。

しかし遺産を分けてもらい、家族を捨て、他国へ旅に出て放蕩生活におぼれ、最後には食べるものにも事欠いて、みじめな姿で帰った自分を父親は受け入れてくれるだろうか …。「今さら帰ってきて、なんだおまえは！」と相手にもされないのではないだろうか …。弟息子にはそんな不安があったはずです。それでも、どうにもならない身の上を助けてほしいという切羽詰まった気持ちが、家へ帰ってもう一度やり直そうと決心させたのでした。

「まさか、まさか！」の「父」の歓待

ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、
接吻した。 21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を
犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』 22 しかし、父親は僕(しもべ)たちに言った。『急い
でいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。
23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠(ほふ)りなさい。食べて祝おう。 24 この息子は、死んでいたの
に生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』 そして、祝宴を始めた。

父親の言動に思わず目を疑ったのではありませんか。不肖な家出息子に対するこの父親の態度は、

ふつう考えられませんよね。まあ日本の親だったら、さんざん怒ったうえで、チンタラちんたらお説教を垂れ、食事は梅干しとご飯、食べ終わったあとは反省文を書かせ、期間未定の外出禁止命令を出して …、なんて罰を与えるかもしれませんね。

しかし、父親は『まだ遠く離れていたのに、息子を見つけ』とあります。ユダヤの地方は、なだらかな丘陵があって遠くまで見晴らせ、道が丘陵の間をぬって続いているそうです。やせ細り、みすぼらしいボロボロの衣服を着て肩を落としながら帰ってくる息子の姿が見えたのでしょう。「あいつはどうしているだろう、食べ物に不自由はしてないだろうか、病気になっていないだろうか、悪いヤツにだまされていないだろうか …」。父親は毎日夕暮れになると、息子が歩いていった道を眺めていたことでしょう。この個所を山浦玄嗣先生は次のように訳されています。

『まだ遥か遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、その哀れな有り様に胸も張り裂けるような思いに駆られ、走って、走って、〔愛しい〕倅の首に縋りつき、頬ずりをした』。

『共同訳』と比べて、父親の息子に対する愛情がビンビン伝わってきますね。いいですねぇ、『山浦訳』は！

さらに、『肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう』と食事の準備をさせます。「肥えた子牛を食べる」というのは、当時の最大のお祝いのときに限られていたそうです。「最高のおもてなし」で息子を迎えたのです。なぜなら『息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったから』だといいます。

「まじめ」な兄息子と父の関係

大歓迎会が始まりました。ところで、兄息子はどうしていたのでしょう。

25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。
26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。 27 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』 28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。 29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦ともども一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。 32 だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』

兄息子はまじめで、ずっと父親と一緒に働き、財産を求めることもしませんでした。汗にまみれてその日の働きを終えて帰宅すると、楽しそうな音楽が聞こえ、多くの人たちが踊っているようなざわめきが聞こえました。何だろうと僕にたずねると、家出して身を持ちくずして帰って来た弟を父が無条件で迎え入れ、歓迎の宴を開いているとのこと。怒った兄は家に入ろうとしませんでした。船本弘毅先生(関西学院大学名誉教授)は、兄が父にむかって言った言葉(29～30節)の中で、次の三つに注目します。

まず兄は『わたしは何年もお父さんに仕えています』と切りだしました。「仕える」の原語には「奴隷としてはたらく」という意味があるそうです。兄は今までの自分を、父の「奴隷」として感じていたことがわかります。「仕事をさせられている」と、ずっと思っていたのです。兄にとって父との関係は「父と子」ではなく、「主人と奴隷」の関係だったのです。

また兄は、自分が宴会を開くときには「子山羊」一匹さえ出してもらえなかったのに、弟には「肥

えた子牛」が出されたことに文句を言いました。兄は「数」や「量」、そして「質」が支配する「物の世界」に囚(とら)われていたのです。私たちも同じ … です … かな？

さらに、兄は弟を「あの息子」と呼んでいます。「あんなヤツは自分の弟といえない」という憎しみがこもっています。父のことも「あなた」と言っています。一緒に暮らしていても、「こころ」は必ずしも共にあったわけではなかったということでしょう。兄にとって、父も弟もほんとうの意味の「家族」ではなかったのです。

船本先生はここで、マルティン・ブーバー(Martin Buber、1878-1965、オーストリアの哲学者)の『我と汝』を引用します。ブーバーは、人間には「Ich und Du(我と汝)」と「Ich und Es(我とそれ)」という二つの〈根源語〉があるとします。『世界は人間のとる二つの態度によって二つとなる』という文章から始まる名著です。杉山好(すぎやまよしむ)先生からその名前とこの本を教わりました。ブーバーは、私たちが出会うものを「汝」と「それ」に分けました。

【三人称で指し示せる「それ」は、ほかのものと交換できる「もの」であり、私が二人称で呼びかける「汝」は、今、ここにいる、誰とも代わることのできない唯一の「あなた」である。そのかけがえのない「あなた」の呼びかけに私が応えるとき、私もまた「あなた」にとってかけがえのない存在となり、そこに、我と汝の絆が生まれる。】(『もういちど読む　山川 倫理』)。

他者との出会いは、互いの呼びかけに耳を傾け、それに対していつも誠実に応答しようとする責任を引き受けることであり、それによって人と人との絆が結ばれることを説いた本です。兄息子にとって、父と弟に対する関係は、「わたし―もの(それ)の関係」だったといえます。

慈(いつく)しみ深い「父」である神

父親は宴会を始める前、そして兄息子から文句を突きつけられたときの二度、『お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった』という言葉を口にしています。賢明なる読者のみなさんはもう、このたとえ話が何を伝えたいかおわかりだと思います。そうです、第62回の『「見失った羊」のたとえ話』と同じです。神さまがどういうお方であり、私たちがどんな人間であれ、どれほど私たちのことを思っていらっしゃるか ―。とくに今回のお話は、私たちが放蕩に身を持ちくずしてしまった弟の立場に身をおいてみたとき、このたとえ話がよ～くおわかりになると思います。えっ、「オレ(私)は、そんなワルさを一度もしたことがないよ！」ですって？まぁまぁ、「仮に」の話です。

これで『放蕩息子のたとえ』の話は終わりにしてもいいのですが、どうしてもヘンリ・ナウエン(Henri J.M. Nouwen、1932-1996)神父の著書『放蕩息子の帰郷 父の家に立ち返る物語』を語らずして終わるわけにはいかないのです。今まで取りあげなかったのは、その内容が入門者のみなさんには少しむずかしいからです。いやいや、わたしもいまだに十分理解できたという自信がありません。ですから、ナウエン氏の文章の主旨をどの程度、正確にお伝えできるかわかりません。なんとかまとめたいのですが、もしかしたら途中で「お手上げ」になるかもしれません。次回は別の内容が載っていることもあり得ます …。あまり期待しないでお待ちください。

神さま、私たちがどのような人間であっても、あなたはいつもご自分のもとに私たちが戻って来るのを待っていらっしゃいます。私たちがキリストの光によってこころの闇を照らされながら、「帰郷」への道を歩むことができますように。

(2017.08.10.)

【引用・参考にした書籍など】　・新共同訳 『聖書』　・船本弘毅 『イエスの譬話』
・山浦玄嗣 『ガリラヤのイェシュー』　・百瀬文晃 『キリストに出会う』
・マルティン・ブーバー 『我と汝・対話』(1979、岩波文庫)
・小寺 聡 編 『もういちど読む　山川 倫理』(2011、山川出版社)